

# 2021年度「わいわい文庫」利用アンケートの結果と考察

専修大学文学部  
教授 野口 武悟

## はじめに

公益財団法人伊藤忠記念財団（以下、伊藤忠記念財団）では、2011年度からマルチメディアDAISY図書「わいわい文庫」の製作と寄贈を行っています。寄贈先の機関は、特別支援教育を行っている全国の学校（特別支援学校や、特別支援学級・通級指導教室を設置する小・中・高等学校）とその学校図書館、障害者サービスを行っている全国の公共図書館、医療療育機関や障害者施設などです。

寄贈した「わいわい文庫」の利用状況と意見を把握し、よりニーズに適った作品の製作につなげることをおもなねらいとして、伊藤忠記念財団では、毎年、寄贈先に対してアンケートを実施しています。

2021年度のアンケートへの回答は、寄贈先1,423件のうち1,271件から寄せられました（回収率89.3%：2022年1月20日現在）。本稿では、この2021年度のアンケートのおもだった結果を紹介するとともに、筆者による若干の考察を述べたいと思います。

なお、アンケート項目は、年度によって若干異なっています。過去のアンケート結果も参考になりますので、本冊子のバックナンバーもあわせてぜひお読みください。

## おもなアンケート結果とその考察

### (1) 「わいわい文庫」の利用場面・方法（複数回答可）

回答	学校	図書館	その他	合計
授業で利用	471	6	30	507
休み時間などで自由利用	209	0	16	225
図書館内での閲覧	157	151	9	317
個人（家庭）への貸出し	77	205	29	311
団体への貸出し	5	102	5	112
イベント・行事で利用	31	44	19	94
活用方法を検討中	270	88	33	391
その他	57	25	35	117

全体としては、「授業で利用」が最も多く、次いで「活用方法を検討中」「図書館内での閲覧」「個人（家庭）への貸出し」などが続きます。「授業での利用」が最多なのは、寄贈先の65.6%が学校であることが関係しているといえます。同時に、学校では「わいわい文庫」を授業の教材として活用したいニーズが高いこともうかがわれます。

見逃せないのは、「活用方法を検討中」が2番目に多い点です。今後の「わいわい文庫」の継続的な寄贈受け入れと利・活用を考えると、活用方法の検討に役立つような情報提供のさらなる取り組みが必要なのかもしれません。実際、2020年度のアンケートでは、伊藤忠記念財団が今後取り組むべき活動についてたずねましたが、「活用事例の紹介」が3番目に多い結果となりました。すでに本冊子の刊行をはじめ、オンラインでの読書バリアフリー研究会など、伊藤忠記念財団としてはさまざまな情報提供の取り組みをしているところです。これらに加えて、どのような情報とその提供の取り組みを寄贈先は求めているのかについて、次年度以降のアンケートで調査してもよいかもしれません。

## (2) 「わいわい文庫」の利用形態（複数回答可）

回答	学校	図書館	その他	合計
作品を CD 1 枚ずつに分冊	171	105	27	303
CD を複写	71	50	8	129
PC のハードディスクに複写・共有サーバーに保存	182	15	29	226
タブレット端末に保存	184	35	43	262
その他	181	104	22	307

全体としては、「その他」を除くと、(1) 寄贈された「わいわい文庫」のCDを1作品ずつ別のCDに写して提供や利・活用する、(2) タブレット端末に保存する（なかでもiPadが多い）、(3) PCで共有したりサーバーに保存するが多い順であり、これらが「わいわい文庫」利用形態の傾向ともいえるでしょう。

(1) は、特に図書館において顕著で、個人利用者への貸出による提供をメインにする図書館では、1作品ごとにCDを分けたほうが利用者に提供しやすいものと思われます。一方、(3) は、学校で目立ちます。学校では、「GIGAスクール構想」のもと、

Wi-Fi環境や一人1台端末の整備などが進むなかで、サーバーで保存や共有したほうが利・活用しやすいものと思われます。

ところで、「わいわい文庫」は2021年度から国立国会図書館の視覚障害者等用データの収集および送信サービスによる配信を開始しています。過去のアンケートでは、インターネットを通しての作品の配信希望が多く寄せられてきました。これらの意見に応えるものといえます。配信が始まって約1年が経ちますが、配信の認知度や利用しての反応などについてもアンケートで把握してはいかがでしょうか。

### (3) 「わいわい文庫」の利用者（複数回答可）

回答	学校	図書館	その他	合計
視覚障害	88	88	19	195
聴覚障害	50	17	7	74
肢体不自由	156	22	37	215
病弱	51	3	10	64
知的障害	408	37	49	494
※自閉症スペクトラム	265	5	29	299
※学習障害 (LD)	260	38	39	337
※注意欠陥・多動性障害 (ADHD)	264	14	29	307
発達障害 (※)のうち上記障害種にチェックのないもの	53	18	14	85
高齢者	0	17	2	19
外国籍	26	3	3	32
わからない	24	88	5	117
その他	69	88	22	179

全体としてみると、「発達障害」のある人が最も多く、次いで「知的障害」のある人、「肢体不自由」の人、「視覚障害」のある人などとなっています。「発達障害」のなかでは、ディスレクシア（読みの困難）が中心症状とされる「学習障害 (LD)」のある人が一番多くなっています。

国際的にも、マルチメディアDAISY図書は、「学習障害 (LD)」や「知的障害」

のある人の読書に利用されることが多く、「わいわい文庫」も同様の傾向にあることがわかります。もちろん、表に示された結果から明らかなように、さまざまなニーズのある人が利用して、読書を楽しんでいることがわかります。マルチメディアDAISY図書である「わいわい文庫」は、ユニバーサルな読書メディアであることが改めて確認できたともいえるでしょう。

#### (4) 自由記述から

毎年度のことではありますが、今回のアンケートでも、たくさんの感想や要望が記述で寄せられています。それだけ、「わいわい文庫」への高い関心を示すものといえます。

記述内容の半数以上は利用しての感想などで、好意的なコメントがほとんどです。好評だからこそ、さらなる期待を込めて、要望もたくさん寄せられています。

なお、少数とはいえ、今後の寄贈は不要との連絡も81件寄せられています。2020年度とほぼ横ばいの状況です。その理由としては、利用者が不在や少数、活用できていないなどです。(1)で紹介したように「活用方法を検討中」との意見が多い現状にあります。検討の結果として不要との判断に至らないように、情報提供などのアプローチを強化していく必要があると思います。

#### おわりに

文部科学省による「令和2年度学校図書館の現状に関する調査」の結果が2021年7月に公表されました。今回の調査では、初めて、学校図書館におけるバリアフリー資料の所蔵状況を調査しています。2019年6月に「視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律」(読書バリアフリー法)が制定されたことを受けてのことと思われます。調査の結果、学校図書館におけるマルチメディアDAISY図書の所蔵率は、小学校1.3%、中学校1.0%、高等学校0.6%、特別支援学校(小学部)25.8%となっています。

特別支援学校ではおよそ4分の1の学校がマルチメディアDAISY図書を所蔵しています。おそらく、その所蔵作品の多くが「わいわい文庫」ではないかと思われます。これは、伊藤忠記念財団による電子図書普及事業の大きな成果といっても過言ではありません。とはいえ、まだ4分の1の特別支援学校しか所蔵していないともいえます。残りの4分の3の特別支援学校への普及に向けた取り組みが求めら

れます。また、マルチメディアDAISY図書を必要とする児童生徒は、小学校、中学校、高等学校にも数多く学んでいます。これらの学校への普及も欠かせません。

2021年5月に「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（障害者差別解消法）が一部改正され、これまで行政機関等（国公立の学校や図書館など）にのみ義務づけられていた合理的な配慮の提供が、今後3年以内に民間事業者（私立の学校や図書館など）にも義務化されることが決まりました。この点からも、学校や図書館における「わいわい文庫」の必要性和重要性がさらに高まっていくことは間違いないでしょう。

伊藤忠記念財団が電子図書普及事業を始めて10年が過ぎました。その成果の一端は先ほどの文部科学省の調査結果で確認したところですが、すべての人たちに読書のよろこびを伝えるにはまだまだ道半ばといえます。これからの10年、さらにはその先を見据えて、伊藤忠記念財団には電子図書普及事業、そして「わいわい文庫」をより一層発展させてほしいと期待しています。

